

ユニークな産業構造・地域資源を積極活用 「日本のへそ」都市が進める新たな産業振興策

地域の医療拠点・西脇病院が もたらすもの

平成21年11月29日、平成16年度からの4期にわたる大規模な改築工事をへて、市立西脇病院(病床数320床、診療科数18科)がグランドオープンした。当日は多くの市民や関係者が詰め掛け、盛大な記念式典も開催された。市立西脇病院は、グランドオープン直前に日本がん治療認定医機構の認定研修施設となった。また北播磨地区最大の規模を持つ同病院は屋上にヘリポートを備え、災害時においても地域の拠点病院として機能することが期待されている。

市立西脇病院の改築工事は文字通り、西脇市にとって従来の主要事業だったが、それは別の観点からも、同病院の完成は関係各方面から大きな注目を集めていた。

周知のように地域医療をめぐる環境は近年、非常に厳しい。特に平成16年に研修医自

ら研修先を選択できる新医師臨床研修制度の導入後、地方都市の病院は深刻な医師不足に陥っている。市立西脇病院も平成16年まで50人いた常勤医が30人台にまで減少した。

とりわけ医師不足が深刻な小児科や産科を持たない地方の総合病院は、今や決して珍しくない。市立西脇病院は産科・小児科を併設し、それぞれ複数の医師を置く北播磨地域唯一の病院でもある。医師不足で一時途絶えていた小児科入院診療も復活した。同病院のグランドオープンが関係各方面からの大きな注目を集めたのは、そうした理由に加え、研修医確保の方策のモデルケースともなり得る取り組みが始められたからだ。

「地元の商店約250店加盟の西脇市商業連合会が、売り上げの一部で基金をつくり、西脇病院への研修医希望者に支度金を支給することを決めてくださったのです。これは総務省地域企業経営企画室からも『全国的に珍しい取り組み』と評価されたように、地域全



きしじいいち
来住壽一
西脇市長

体で支える地域医療の新しい取り組みの発信といえるでしょう」

そう語るのは来住壽一西脇市長である。研修医確保の対策として西脇市もこれまで、オール電化対応の研修医用公舎を格安家賃(月額1万5000円)で提供するなど各種の便宜を図ってきた。今回始められた支度金制度は、政府の定額給付金支給の際に連合会が発行した5000万円分のプレミアム付き商品券の売り上げの1%(50万円)で基金を創設し、連合会が市立西脇病院に寄付。病院はそれを研修医の生活必需品購入費などの目的で、1人当たり5万円を支給する仕組みだ(支

給は本年4月から)。「それだけではありません」と来住市長は続ける。「西脇市では市立西脇病院を核とする地域医療のネットワークを充実させるため、さまざまな団体が貢献してくださっています。



西脇市民はもちろん北播磨地域全体が待望していた市立西脇病院のグランドオープン

例えば西脇市多可郡医師会の病診連携に基づく休日急患センターの運営もそうです。また平成19年に市立西脇病院の小児科医が1人になり、入院診療ができなくなったときには、西脇市のお母さんたちが『市立西脇病院小児科を守る会』を発足し、心強いサポートをしてくださいました。今では『西脇小児医療を守る会』に発展し、多彩な活動を通じて地域の小児医療に向けた市民意識の高揚に努めてくださっています」

研修医確保に向けた新たな取り組みの成果については、まだ予断を許さない。だが市立西脇病院を核とする地域医療圏構築に向けた行政・事業者・市民の協働による取り組みは、今後、安全・安心な市民生活の実現という観点からも、西脇市の協働のまちづくりを力強く下支えするキープポイントになる可能性を秘めているといえる。

特徴的な産業構造が生む 農・商・工の調和

西脇市は平成17年10月、旧西脇市と隣接する旧黒田庄町による1市1町の合併を果たした。これにより西脇市は旧西脇市7地区に黒



伝統的工芸品と地域ブランドにダブル指定されている織細・華麗な播州毛鉤の制作風景(伝統工芸士・竹中健一氏)

田庄地区を加えた8地区となった。典型的な田園地帯である黒田庄地区は後に述べるように、商工業都市として発展してきた旧西脇市にない大きな特徴を持っている。

もともと旧西脇市には、200年以上の歴史を持つ先染綿織物(播州織)と、釣針産業(播州毛鉤をはじめとする播州釣針)という確固たる地場産業があった。さらに世界シェア上位を占める米国半導体製造企業日本人の生産拠点が立地したことなどにより、西脇市は自然・田園・産業・都市の各機能が有機的につながる北播磨地域の拠点都市へと発展してきた。そこへ典型的な田園地帯で、黒田庄和牛の産地でもある旧黒田庄町が加わったことにより、西脇市は農・商・工のバランスが高度に調和する都市となった。

それだけではない。播州織は先染綿織物で

「その背景の一つには、中国製生地などの激しい価格競争からの脱却を目指したいという思いがあります。播州織の命はやはり品質の高さです。その特徴を生かすためには、価格を競うのではなく、高品質の製品による新たな需要を生みだすことに努力を傾注する必要があります」というのが、産地としての自負なのです」

(来住市長)

西脇市はその拠点として、業界と共に第三セクター、財団法人北播磨地場産業開発機構を設置。ファッションショーも含めた播州織の見本市「播州織総合素材展」を毎年3月に東京で開催するようになった。また神戸ファッション専門学校との提携による神戸での播州織ファッションショー、地元の高校生たちによる播州織を取り入れた服飾作品の制作およびファッションショー、毎年8月に開催の「へ



旧織物工場を活用する産学連携プロジェクトで生まれた工房ショップ「播州織工房館」内には播州織を使った服飾・雑貨が並ぶ

その西脇・織物まつり」におけるファッションショーなども恒例化している。そうした外向きのアピールと並行して、播州織はTMOで進められる中心市街地活性化の原動力としても活用されている。特に県の先導的活性化事業を活用して平成18〜20年度に実施された「播州織ファッション特区事業」の際に、織物工場の跡地や空き家などを活用する形で誕生した播州織工房館、西脇情報未来館21(播州織オーダージュッツ等販売)、デザインーズブランドショップなどを巡る回遊コースは、中心市街地活性化にもつながるほどの人気を集めている。

実際に中心市街地を巡ってみると、国登録有形文化財「旧来住家住宅」など歴史を感じさせる落ち着いた町並みのたたずまいに、ショップなどが溶け込み、その異質な色彩や明るさが町並みにさり気ない刺激を与えているのが分かる。

またデザインーズブランドショップに展示されている播州織作品を手にとると、服飾素材として大量生産されてきた播州織が、新たなデザインの息吹を与えられることで、見事な一点もの・ファッションに生まれ変わることで実感できる。それも素材としての播州織



各種作品展も開催される中心市街地のランドマーク「旧来住家住宅」(大正時代・国登録有形文化財)

の品質の高さと風合いの良さが根底にあればこそ、だろう。

華やかなファッションの現場から一転、次に黒田庄和牛の堆肥が主人公の「有機の里づくり」の現場を訪れた。平成21年6月、豊かな田園地帯に開所したばかりの西脇市土づくりセンター「ゆめあぐり西脇」である。

「ゆめあぐり西脇」では黒田庄和牛の生産地である特色を生かし、約1400頭の黒田庄和牛から排出される牛ふんを年間3600t

全国一(70%)のシエアを占め、ロゴマークともども地域ブランドの認定を受けている。釣針産業は地域ブランドと伝統的工芸品にダブル認定された播州毛鉤を象徴に、釣針の全国シェア90%以上の生産量(周辺地域の生産量も含む)を誇る。西脇市に生産拠点を置く米国半導体製造企業日本法人は、大阪・神戸からも至便な位置にある西脇市をアジアの最重要拠点として位置付け、高レベルの投資を続けている。黒田庄和牛は高級和牛「神戸ビーフ」として出荷されるブランドビーフだ。

このように西脇市の経済をけん引する産業



東京・恵比寿で毎年3月に開催される「播州織総合素材展」

構造は、品質・知名度共に、非常に高度に特化しているところに大きな特徴がある。

「播州織にしても播州釣針にしても、黒田庄和牛にしても、長い伝統を有する地場産業が集積していることにより、西脇市にはそれぞれの分野で、技術的にも人材的にも大きな蓄積があります。世界の最先端をいく半導体製造企業日本法人も常に大きな雇用を生み出し、産業立地に至便な西脇市の付加価値を高め、西脇市では現在、このように特化した産業構造を地域資源として活用し、新たな産業創出・雇用創出に取り組んでおります(来住市長)

そのための仕組みづくりとして、播州織・播州釣針という地場産業と半導体製造産業を「伝統・先端」「特化産業」「技術活用型関連産業」と区分。それらの産業が持つポテンシャル(伝統・先端技術、豊富な人材など)をけん引役に、さまざまな形で関連産業の誘致や育成、製品の付加価値向上や新事業・雇用の創出を図ろうとしている。

一方でブランド牛・黒田庄和牛の堆肥を活用した「有機の里づくり」を進め、これを「地域」「資源再生」「活用型関連産業」と区分している。環境保全型農業の実現で安全・安心な農産物生産地としてのイメージを高め、食料・健康関連の企業誘致や、他産業(農・商・工)との連携による新事業・雇用創出を目指すための取り組みだ。

今回の取材ではそのうち、TMOによる中



播州織コットンを素材にデザインした各種服飾作品が並ぶデザイナーズショップ(玉木新雄ショップ)

播州織のさらなるブランド化と「有機の里づくり」

播州織は従来、生地としての生産出荷が中心だった。現在もそれは同様だが、内外の一流ファッションメーカーが競って素材にしてきた播州織に、これからは産地の視点で積極的に、デザインや生地の新たな使用方法などを提案することにより、新たな需要の掘り起こしをしようとするさまざまな試みが行われている。



西脇市では市民が策定した「地区まちづくり計画」に基づき各種市民協働事業が進行中

本の「へそのまち」を事あるごとに標ぼうしてきた。それは東経135度と北緯35度の交差点、すなわち日本列島の地理的中心に西脇市が位置していることに由来する。

「西脇市が日本の中心点にあることは、大正8年、東京高等師範付属小学校の肥後盛熊先生からの指摘で地元(当時は多可郡津万村・比延庄村)に伝わりました。それはひそかなお国自慢にもなりましたが、地元の特質として市民が改めて意識し始めたのは昭和52年のことでした。市制施行25周年に当たって依頼した国土地理院の最新計測でも西脇市が「日本のへそ」にあることが再確認され、それを契機に大いにアピールすることになったので



子午線上がスタートラインという西脇市ならではの「西脇子午線マラソン」には毎年県内外から参加者が集う(12月)

の予定で堆肥化している。実際に一次発酵、二次発酵の現場を訪れたが、意外なほど臭気が少ない。送風によって微生物の活動を活発にして牛ふんの発酵を促す堆肥製造方式をとっていること、さらに臭気を伴う風は常に強力な脱臭装置を通して外気に排出されるため、建物の内外とも臭気がこもらないのだ。

「ゆくゆくは『ゆめあぐり西脇』で生産され

す(来住市長)

それ以後、シンボルマークの制定、「北海道のへそ」を標ぼうする富良野市との友好都市親善協定の締結、「日本のへそ・西脇子午線マラソン大会」の開始、世界の名所に杭を打ち込んでいるドイツ人芸術家ヘルムート・ベッテンハウゼン氏によるメモリアル杭の打ち込み、「日本へそ公園」整備、西脇市出身の美術家・横尾忠則氏の作品を収集した西脇市岡之山美術館のオープン(日本へそ公園内)、JR加古川線「日本へそ公園駅」開業、織物まつりと合体させた「へその西脇・織物まつり」の開始——など、数え上げれば切りがないほどにさまざまな事業を実施してきた。

「さらに現在では全国各地で地理的な『へそ』『中心』『重心』などを標ぼうする自治体と『全国へそのまち協議会』を結成して、物産展を持ち回りで開催しています。また『へそ』の由来である地球物理・宇宙物理的な興味を子どもたちにも持ってもらうために国内最大級の天体望遠鏡を備えた、にしわき経緯度地球科学館「テラ・ドーム」を建設し、さまざまなイベントや学習プログラムを実施しています」(来住市長)

西脇市にとっての「日本のへそ」は、今や単なる位置的なアピールポイントではない。次代を担う子どもたちの夢の源泉でもあり、市民がイメージする「ふるさと」の重要な特徴としても、広く深く認識されている。

そのような意味では、西脇市で現在本格化

る堆肥を使い、黒田庄地区の農地を有機土壌化し、地区を挙げて「有機の里」とするのが、私たちの夢であり目標です。そしてこの事業によって、自然環境の保全、農産物の質の向上、地域資源の有効利用、トレーサビリティを通じた消費者との連携、地産地消の推進などを目指しています(来住市長)

西脇市では黒田庄地区を中心に稲作、黒大豆、「ひょうご」安心ブランド認定農作物である特別栽培米(コシヒカリ、山田錦)、レタス、シヨウガ、キャベツなどの生産に取り組んでいる。また金ゴマは「日本のへそ」(詳細は後



郷土が生んだ美術家・横尾忠則氏の作品を収蔵する西脇市岡之山美術館(設計・磯崎新氏)



黒田庄和牛の牛ふんを堆肥化する西脇市土づくりセンター「ゆめあぐり西脇」で発酵を待つ牛ふんの山

しつつある「地区まちづくり計画」に基づく市民協働のまちづくりも想起される。同計画は市内8地区それぞれの住民の手によって策定されたものだ。内容はささやかなあいさつ運動から、幹線道路も含めた道路整備、防犯・防災対策、バリアフリーのまちづくりなどにまで至る。その積極的な活動ぶりは、まさに「地域のへそ」を自分たちの手ではぐくもうとするかのような感がある。

そのように考えれば、地域医療圏の拠点・市立西脇病院の存在や知名度・品質共に高度に特化した産業構造と今後の振興策の在り方なども、まさに地域の新たな「へそ」づくりといえるのではないか。「へそのまち西脇」の今後が、いろいろな意味で注目される。

(取材・文 遠藤 隆)

述)を標ぼうする西脇市の特産品「日本のへそゴマ」として特産品に育てる取り組みが行われている。

将来的に「有機の里づくり」が進展すれば、そのクリーンイメージと共に、西脇の農産物の付加価値はさらに高まるだろう。

西脇市のまちづくり「へそづくりに」

西脇市には「日本のへそ」というキャッチフレーズがある。前述した「日本のへそゴマ(金ゴマ)」の例のように、西脇市ではこれまで「日



「日本のへそ」西脇市を象徴する日本へそ公園(建物は「にしわき経緯度地球科学館「テラ・ドーム」」)